

啄木全集

第八卷

筑摩書房

啄木全集 第八卷 啄木研究

一九六八年二月二十九日 初版第一刷発行
一九七四年二月二十日 初版第七刷発行

編集代表 小田切秀雄

発行者 井上達三

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
株式会社 筑摩書房
電話 東京 四七六五(代表)
振替 東京 四一二三
郵便番号 一〇一―九一

本文用紙 三菱製紙
表紙クロス 東洋クロス
印刷 鹿印
製本 矢島製本

(分類) 0392 (製品) 70808 (出版社) 4604



明治三十四年二月，前列左から古木巖，啄木，
川越千代治，後列左から小野弘吉，阿部修一郎

目次

明日の考察

幼き日の兄啄木

啄木君の思い出

啄木の借金メモ

晩年の石川啄木

一つの疑問

緑蔭の家

石川啄木君の歌

啄木に関する断片

啄木を繞る人々

土岐善麿 三

三浦光子 七

与謝野寛 三

宮崎郁雨 完

金田一京助 翌

石川正雄 矣

荒畑寒村 八

若山牧水 三

中野重治 六

吉田孤羊 二〇

石川啄木と自然主義

『啄木晩年の社会思想』序

近代人啄木

『我等の一団と彼』そのほか

石川啄木と大逆事件

歌人啄木

啄木の時代的背景

啄木の日記

青年教師としての啄木

啄木の像はどのように刻まれてきたか

啄木の評論

『あこがれ』前後の啄木

土方定一 二三

川並秀雄 二三

福田恆存 二五

荒正人 二五

平野謙 二五

窪川鶴次郎 二五

石母田正 二五

桑原武夫 二五

上田庄三郎 二六

久保田正文 二六

猪野謙二 二七

伊藤整 二八

啄木における短歌と詩の問題

「ローマ字日記」について

啄木伝覚え書

啄木における歌の別れ

*

雑 録

参考資料

伝記的年譜

文献目録

解 説

解 題

国崎望久太郎 三三

相馬庸郎 三二

遊座昭吾 三三

今井泰子 三三

三五

三七

岩城之徳 四六

昆 豊 器

小田切秀雄 四九

岩城之徳 四三

啄木研究

明日の考察

土 岐 善 磨

1

「明日の考察！これ実に我々が今日に於て為すべき唯一である。さうして又総てである。」――

啄木の思想生活は、その晩年においてここに到達した。現代の社会組織、政治組織、家族制度、教育制度、その他百般の事象に互つて、静かに、熱心に、深く、検覈し、討究し、批判しなければならぬ、昨日に帰ろうとする旧思想家、今日に没頭しつつある新思想家、それらの人々の前に、新たに明日という問題を提示して、之を「時代」の意志と体験に統合しなければならぬ、「君、僕はどうしても僕の思想が、時代より一步進んでゐるといふ自信を此頃捨てることが出来ない。」――それは決して彼の「自信」ではなかつた。然も当時、極めて少数の彼の周囲のみしか、彼の

「新しき明日」への先駆者たる真価は知らなかつたのである。彼は「明日」に対する欲求と、準備と、計画とのために、焦慮し、苦闘し、絶望し、諦め、悲しみ、怒り、嘆きつつ、身を切るような物質生活の窮乏の中に、僅かに廿七歳の短生涯を終つた。彼の全精神は「明日」のために極度の緊張をなしつつその肉体は遂に「今日」のいたましい犠牲となつたのである。

新しき明日の來たるを信ずといふ

自分の言葉に

嘘はなけれど――

新しき明日に対する信念と気魄は、理性の光りに彼を白熱化しながら、しかも、その明日の確実な足音が、いつ、何処から近づいて来るか、頼みがない不安と、懷疑と、自意識のために、彼は余りに紛然と諸方に起りつつある今日の雑音の中で、堪えがたい圧迫と、断えざる疲労から逃れけることができなかった。

何となく明日はよき事あるごとく

思ふ心を

叱りて眠る。

こうして寢床に入る。一瞬の希望が微光をもたらして来るかとおもうと、また底知れぬ闇黒の中に消えてしまふ。

やっと眠れたかとおもうと、毎晩、盗汗と悪夢との連続におびやかされつつ、不快な寢覚がつづく。

手も足もはなればなれにあるごとき

ものうき寢覚！

かなしき寢覚！

「手も足もはなればなれ」な、この不快な寢覚は、ただ安慰休息を奪われた肉体の姿なのではない。この傷ましい姿、悲惨な生活の実情を彼は「今日」そのものに見たのである。それは有識無産階級の青年にとつて、「時代閉塞」のあらゆる方面における状態、彼自身もその現在の一人なのであった。「金を握つた時でなければ、頭の軽く、明るくなることのない」生活、「自己を恃めと君は云ふかも知れない、僕も恃みたい、然しその自己が、既に健康の心配を惹起すほどの労役に服してゐながら、猶且少しでも僕の苦痛を減じさせてくれない」物質生活、この胸苦しい社会生活の実情を、彼は彼の環境にいやというほど直視したのみでなく、彼の実際生活が、この苦惱そのものであった。

何事も金、金とわらひ

すこし経て

またも俄かに不平つのも来

若干の「金」を懐中に入れて、酒をあふれば忘れてしま

えるような不平ではない。その「金」が現在の社会組織の中で運用されてある限り、彼の不平は決して消えてしまうような性質のものではなかった。何事も金、彼は、金の力の余りに強大な世界にあって、「金のない世界」にあくがれた、そして、まず当面に「金の世界」、その社会における支配の現象と事実を直視しようとしたのである。

「一切の空想を峻拒して、其処に残る唯一つの真実、——必要——、これ実に我々が未来に向つて求むべき一切である。我々は今最も厳密に、大胆に、自由に、今日を研究して、其処に我々自身にとつての明日の必要を発見しなければならぬ、必要は最も確実なる理想である。」

この「必要」の内容を、社会的に、経済的に、科学的に検覈し、討究する時、彼は当然、唯物論者にならざるをえなかったのである。社会主義者——彼は、彼自身をそう呼ぶことに就て、永い間躊躇していたのであるが、遂に、みずから敢然と、それを標示する時が来た。社会主義を最後の理想としたのではない。「人類の社会的理想の結局はアーキズムの外にない」ことを認め、その主張ほど、「大きな、深い、そして確実にして且つ必要な哲学は外に無い」ことを知つたのであるが、——クロポトキンの著書に接して、彼がどんなに驚いたか！——彼は現実に対する

実、家として、社会主義者となつたことを告白している。それは一種の国家社会主義であつた。「人間の権利としての安楽の要求」、共同生活の社会的本能、道德的感情が「必要」によつて、解放されるとき、その生活体としての様式に、彼は国家の対立をみとめていたのである。

2

彼が、この「必要」という思想を「確実な理想」としてつかむ迄、それは一通りの苦勞努力ではなかつた。年少、有り余る才情と、自負と、不平と、反抗と窮迫の中に、東北の一寒村から上京した、まだ肩揚げさえとらぬ白面の少年が、家族の生計を支えなければならぬ責任のために、花やかな都会生活と野心勃勃たる文壇を去つて、インキも凍る北海道に放浪しつつ、明治四十一年、偶ま中央の文壇に勃興した自然主義の運動を遠望して、性来の野心をおさえることの出来なかつたことは言う迄もない。当時、既に「あこがれ」の詩人啄木として、その莊重華麗な声調に数多くの先輩をおどろかしていた彼は、その詩集を、「空想と幼稚な音楽と、微弱な宗教的要素と因襲的感情の外に何物もなかつた」ものと冷然火中に投じて、未練から哀傷へ哀傷から自嘲へ、しかもそれを人にはあらわに見てとら

れまいと、傲然とやせこけた肩を聳やかしながら、再度の上京を決心して、氷と雪の中に憐れな妻子を残し、海路遙々と、横浜に上陸したのは、彼が二十三歳の春四月であつた。漂泊と、焦躁と、困憊と、「生活に適合しない男といふ現実暴露の悲哀」——「現実暴露の悲哀」は当時自然主義論における一つの標語になつていた——と、薄汚れた柳行李一つの外に、何物も彼は持っていなかつたのである。ただ文学、それとても、曾てやろうと思いつつ種々な事情のためにやれなかつたところの文学をやってみるという外に、適当な便宜も心頼みもなかつた。「僕は小説をかけるだらうか？」彼は小さな汽船の船室で唯この不安に泣いた。涙はとめどもなく流れるが、この強い、そしてはかない希望に対して何等自信を持つことはできなかつたのである。

ゆるぎ出づる汽車の窓より

人先に顔を引きしも

負けざらむため

わかれ来てふと瞬けば

ゆくりなく

つめたきものの頬をつたへり

一年近い地方生活の疲労と衰退、いなか廻りの一小新聞

記者として過した彼が、桜さく東京の真ン中に来て先ず第一に痛感したことは、事毎に自分が時代遅れになったことであつた。刻々に来る刺戟、それを本質的に統一すべき綜合の力も欠けてしまつていた。事々物々の間の相違を鋭く看取するだけの批判の眼もぶくなつていた。おずおずと周囲を見廻すと、一年二年前彼には寧ろ物のかずとも思えなかつた友人達が、今は頭のあがらないほどの、その顔を正視しえないほどの圧迫と羨望の念を起させるものとなつていた。彼は臆病さと、自意識のなやみと、都会生活の回避に一時は前へ進む勇氣も方角も発見しえなかつたのである。彼は夜の眼もねぬ努力を続けた。不斷の読書と執筆の八箇月、初めて彼が「おくれを取返した」と思った時、物質生活の窮迫がそのために一層甚しくなつていたことをどうすることもできない。「小説家になる」つもりで着のみのまま上京した彼が、書いても書いてもその小説が売れず、書こうとしても自信のあるものにならなかつた。啄木全集の第一巻に収めた十篇のうち、最後の、「我等の一団と彼」を除いては、皆彼自身この涙と血の結晶を破り棄てるはかなかつたものである。「母」という一篇などは、書肆の手に預けたまま遂に行方がわからなくなつて、遺稿のなかへも入れられていない。彼は自暴自棄にならざるをえ

なかつた。自殺のやれる男とは、自分で自分を信じかねながら、「考へると死ぬ外はない」ほどであつた。「人生に定義がないから、真とは何ぞ美とは何ぞ、皆不可解だ、芸術にも定義なく、従つて価値なく、自己にも定義なく、価値がない、虚無だ、盲動あるのみ」。物心両面にこんなドン底生活が続けつ、その間に数百首の短歌を作つた。自由な散文の国土を死ぬほどの覚悟であこがれた彼が、伝統的な短歌の制約に返つたということは、小説を書いても書けなかつたための、一種の回避には違いない。然し、これを彼は決して盲従的な、無意識的、無反省的な態度でしたのではなくた。彼は却つて、短歌という一つの既成形式を勝手気儘に虐使することによって、一種の快感をえたのである。歌集「一握の砂」のモチーフは、この散文の世界に対する煩悶とあこがれと、詩の世界に対する反逆とかなしみとに依つて成つたものといつていい。ここに詩と散文とは不思議な合一体をなして、万葉以後、初めて社会生活における短歌の新しい存在を主張し、眞の生命をふき返されることになつたのである。「僕にとつて、歌をつくる日は不幸な日だ。刹那々々の偽らざる自己を見つけて満足する外に満足のない、全く有耶無耶に暮した日だ」と彼はいつた。「正直に云へば、歌なんか作らなくてもよいやうな人

になりたい」とも彼はいった。食うべき詩、兩足をぐつと地面につけた詩、実人生と何等の間隔なき心で、日常生活のなかに日記をつけるような態度の詩、我々に「必要」な詩、——必要という彼の晩年の思想の中心が、詩人的素質を多分に持っていた彼にとって、まず「詩」に対する革命心理のうちにあらわれたことは争われない。空想の排斥、現実の尊重である。「詩人たる資格は三つある。詩人は先づ第一に人でなければならぬ、第二に人でなければならぬ。第三に人でなければならぬ。さうして実に普通人の有つてゐる凡ての物を有つてゐるところの人でなければならぬ。」

3

こうして、彼はみずから「真の詩人」として人を直視し社会を直視しようとした。勇氣と熱心と、明敏と率直とをもつて、現実を直視した。こうして彼は、「人」としてその検査を進めてゆくに従つて、彼は当時の自然主義の思想、その運動が余りに不徹底な、その主張が余りに無定見な混乱状態にある事実をいよいよ痛切に観取する一方、有るが儘の人生における当時の「青年」達が、滔々として現在の社会制度の下に、喘ぎ、苦しみ、疲れて、久しく鬱積し來つた自己の力を持てあましてつて徒らに感傷と驚嘆とにふけ

る回顧的な、内訌的な、自滅的な傾向をますます切実に感得せざるをえなかった。然も、この事実、この傾向こそ彼自身が最も強く、最も多く持ちあわせていたものなのである。この「時代」を観察することは、やがて彼自身の自己及び自己の生活を省察することであつた。不遇と失望のドン底におち窪んだ眼をあげて、彼の鋭い理性が直視しえたものは、遂に、「現実」としての動かしがたく見ゆる「強權」の力と、徒らに抽象的な理想にはしる性急な思想と、人類の共同生活体たるべき社会に、相矛盾する現在の、二元的な原則の存在、彼の謂ゆる「時代閉塞」の状態であつた。

「現在の日本には、恰も昨日迄の私の如く、何等の深き反省なしに日本国といふものに對して反感を抱いてゐる人があります。私はそれも止むを得ぬ現象と思ふけれども、然し悲しまずにはゐられません。私は考へます、遠い理想のみを持つて自ら現在の生活を直視することの出来ぬ人は哀れな人です。然し現実に相面接して、其処に一切の人間の可能性を忘却する人も亦憐れな人でなければなりません。……既に我々は我々の現在のいかなる状態に在るかを知りました。この状態は決して満足すべきものではありません。我々は乃ち

進んで、このやうな状態になつたところの原因を探究し、闡明し、そして更に創造者のやうな勇氣を以て、現在の生活を改善し、統一し、徹底させねばならぬのではありますまいか。……あらゆる思想、あらゆる議論の最後は、そして最良の結論は唯一つあります、即ち実行的、具体的といふことです、(と私は思ひます)私は叙上の意味において新しい個人主義を力強く保持して行かうと思ひます、同じ理想から私は、機会があつたら、新日本主義といふものを説かうと思つてゐます。現在の日本には不満足だらけです、然し私も日本人です、そして私自身も現在、不満足だらけです、即ち私は自分及び自分の生活といふものを改善すると同時に、日本及び日本人の生活を改善することに努力すべきではありますまいか。……

4

「私は毎日電車に乗つてゐる。此の電車内に過す時間

は、いろ／＼の用事を持つてゐる忙しい私の生活にとつて、民衆と接触する唯一の時間である。私はこの時間を常に尊重してゐる。出来るだけ多くの觀察を此の時間にしたいと思つてゐる。——そして私は殆んど毎日のやうに私が電車内に於て享ける不快なる印象を回想する毎に、我々日本人の為に、竝に我々の此の時代の為に、常に一種の悲しみを催さずにはゐられない。……

人ありて電車のなかに唾を吐く
それにも

心いたまむとき

彼は常に、それほどの自己省察と敏感とをもつて毎日、民衆と接触する唯一の時間として電車に乗つたのである。片隅に腰をおろして、或は肩と肩ともみ合う吊革にぶら下りながら、或はハミ出された車掌台の黄銅の棒に危く掴まりながら、そこに展開するあらゆる事象を大小となく見逃すまいと努めた。そこには「時代」があつた、「日本」があつた。彼は或る記録のなかに、或る時、盛装した中年の——上流社会の人と見えるような服装をした、しかもその举止と顔との表情の決して上品でない婦人が、既に無効であるべき乗換切符を利用して、うまく一枚をごまかそうと

したことが車掌に発見されたとき、満員の乗客の前で、その婦人が臆面なく執念く、却って車掌に一種の屈辱を加えた情景に對し、すぐ彼は、一外国旅行者がロシアで觀察した一農夫のことを連想したのである。その農夫は、込み合う汽船の中で財布を盗まれたが、間もなくそれは乗合いの軍人の外套から発見された。汽船の副長が、その軍人を警察の手に渡そうとしたとき、「止してござらつせえ」とそれをおしとめて、「慥かに金はハア見つかつただもの、皆此処にあるだ。それをハア此上何が要るだね」といった農夫の一言がそのまま事件を解決させてしまったのである。然し彼は、この日本とロシアとの二つの事件を、ただ両国民の性格の比較對照と早合点してはいけなさと断つて、「私は私の研究をそんな単純な、且つ浅薄なものにしたくない。」と説いている。

彼は新聞の歌壇の選者になっていたことがある。日毎に集ってくる多数の投書を抜いて、それにも「時代」と、「民衆」「日本」というものの考察の資料を蒐集することを彼は忘れなかった。平凡拙劣な投書の一つに、二十首のうち七箇所まで脱字のあることを発見して、彼は、この脱字が筆者の粗忽のためばかりでないことを看過しなかった。年少早くも傷ましい境遇の犠牲となりつつ、おさえ難い野

心と焦慮とに元氣も顔色も衰えて、幸運な人が初めてこれから世の中へ出ようとする年頃に、もう既に難い神経衰弱にかかったものの生活、それと脱字とを彼は別々に離して考えることはできなかつた。二十首の歌に七箇所の脱字をする程頭の悪くなつてゐる人ならば、その平生の仕事にも、脱字があるに違ひない、その処世の術にも、脱字があるに違ひない。」——彼はミリウをはなれて、物質生活の意義と価値とを度外視して、その人を觀察することはできないようになったのである。

歌壇への投書家の中には、また、「憐れなる片田舎の小学教師」があつた。その手紙には、この小学教師が、自分の職務に對してとかく興味を持ちえない事、誰一人趣味を解する者なき片田舎の味気ない事を細々と記して、自分の愛読する新聞紙上に歌壇の新設されたことを喜び、近頃は新聞が著くと先ず第一に歌壇を見る事、今後は「全力を挙げて歌を研究する」、「毎日必ず一通づゝ投書する、」などと認めた文面を読んで、選者たる彼は、同情よりも一種の反感を起さざるをえなかつた。本當に憐れなる田舎教師。彼の反感は更に、己れの為す事、言う事、考える事に対して直視と反省とを欠く人の心を、生活を、寧ろ羨ましく思つたのである。この投書は、手紙にあつた通り、毎日必ず

一通ずつ投函したとみえるが、それも七日か八日続いて、遂に絶えた。それはおびただしい数に上ったが、悉く漫然たる叙事叙景で一首も歌壇には登載されなかった。彼はこれに就いて「私は思ふ、若し某君にして唯一つの事、例へば自分で自分を憐れだといった事に就いてでも、そのいかに、又いかにして然るかを正面に立向つて考へ、さうして其処に動かすべからざる、隠れたる事実を承認する時、その某君の歌は自からにして生氣ある人間の歌になるであらうに、」と暗示している。

いつも逢ふ電車の中の小男の
稜ある眼

このごろ気になる

公園の隅のベンチに

二度ばかり見かけし男

このごろ見えず

忘れぬ顔なりしかな

今日街に

捕吏にひかれて笑める男は

路傍の切石の上に

腕拱みて

空を見上ぐる男ありたり

何やらむ

穩かならぬ目付して

鶴嘴を打つ群を見てゐる

友よさは

乞食の卑しさ厭ふなけれ

餓ゑたる時は我も爾りき

一隊の兵を見送りて

かなしかり

何ぞ彼等のうれひ無げなる

これらが彼の歌集の中で必ずしも傑れているというわけではない。唯これらの一首一首にも、彼の興味の対象と思ふ所の傾向とを窺へば足りるのである。彼のすぐれた数多くの望郷の歌、放浪回顧の歌、そこにあらわれた懐しい自然、忘れがたき人々はまた悉く彼の民衆に対する興味と社会生活における矛盾の悲哀、人類に対する愛と哀憐の表現